

フィラー「まあ」の中心的機能は何か

—日常会話と大学講義の用例から—

柳澤浩哉（広島大学大学院教育学研究科） 馮文彦（広島大学大学院生）

1 先行研究の問題

1.1 先行研究

「まあ」に関する先行研究は複数あるが、ほとんどが“概言性”とでも呼ぶべき性質に「まあ」の中心的機能を求めている（注）。この性質は、「とりあえずの反応」「概言」「処理過程の曖昧性を標示」「但し書き的用法」など様々な言葉で呼ばれる。例えば、川上（1993）はこれを「概言」と呼び、次のように説明する。

「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べようとする」という姿勢・態度に関わるものである。

次は川上（1993）の例である。

(1) A こういううるさい場所はお嫌いですか。

B まあ、そうでもないんです。

(1) の B の「まあ」には、「どちらかと言えば」といった意が読み取れると川上（1993）は述べる。あるいは、大工原（2010）はこの性質を「但し書き的用法」と呼び、「内心のわだかまりにこだわりを残し、それを但し書きする用法」とまとめる。次は大工原（2010）の例である。

(2) リンゴの産地と言え、まあ、青森ですね。

「話し手の内心のわだかまり（たとえば「細かいことを言えば、長野や岩手などの他の名産地もあるけど）をほのめかす。」と説明されている。

1.2 “概言性”と相容れない「まあ」

発表者は大学講義（受講生 50 名以上、90 分×5 本）中の「まあ」「ま」を調査し、“概言性”を想定できない場所で「まあ」「ま」が頻繁に現れる事を確認した。（用例後の括弧は次の意味である。（話）：日常会話、（講）：大学講義、（作）：作例。日常会話と大学講義の用例は発表者が収取。ただし、収集先の説明がある場合は省略。）

(3) ましてや感想を述べてもまあアカデミック・ライティングにはならないね。

(3) はアカデミック・ライティングを解説する講義の中で、その条件を述べる重要な箇所である。“概言性”が排除される場所と考えられる。次も同じ講義の例である。やはり“概言性”は想定できない。

(4) その中でまあ、パラグラフの 3 要素をどういうふうに一、ま読者になんですね、分かりやすく書くか。次の 2 例では正確な数字を提示する場所に「ま」が出現している。

(5) ですから、失業者が数百万、でま 32 年あたりに 600 万人の失業者というふうなところ、ドイツは抱える事となっていきます。

(6) で、まあ当然、え高校で世界史を取った人は知っているものだろうと思いますけれども、ま 1871 年という年にドイツはですね、初めて国家統一をやります。

正確さが要求される場所での「まあ」は、“概言性”と真逆の用法である。

2 先行研究が取り上げていない「まあ」の用法

先行研究が触れていない、あるいは十分な分析のない「まあ」の用法をあげてみたい。

2.1 自慢・尊大あるいは謙遜

「まあ」は尊大な印象を与えることがある。

(7) そうですね。 / まあ, そうですね。(作)

「まあ」が常に尊大な印象を加える訳ではないが、「まあ, そうですね。」を<下→上>の人間関係において発する事は難しい。次の二つは自慢と取れる場所に出現した「まあ」である。

(8) 比較的まあドイツ語が楽に話せるんですけど, ま, そういう目から改めて, 自分の国ってというのは, (話)

(9) まあ, ゆくゆくは世界だけだね。(話)

その一方で、「まあ」が謙遜に現れる事も少なくない。

(10) A 専門は何ですか。

B 専門。 まあ専門というか。とはまだ言えないんですけど, はい。(話)

2.2 例示の時

(11) で, 例えばですね, えーとー, ま, そこでも日本人なのに日本語の事が分からない, (講)

(12) まあ例えば大多数の意見はこのようですので, でこのように (話)

2.3 メタ言語的な発言

それ以前の話をもメタな立場で総括する次のような発言。

(13) まあ, (今の話は) 冗談だけ。(作)

(13)は「まあ」のある方が自然であり、他のフィラーに置き換えると単なる言いよどみになってしまう。

3 「まあ」の中心的機能

3.1 話者は十分な情報を持っている

「まあ」の用法はあまりに多彩だが、発話者の立ち位置がほぼ全ての例文で共通している。それは、話題に関して十分な情報を持つという立場である。次は富樫(2002)の例文とその説明である(下線は発表者)。

(14) A 太郎って, 今何してるの?

B あいつは, まあ, 大学生やってるよ。

B は何かを隠してるのではないか (太郎は本当は大学生ではない, 等) というニュアンスが「まあ」発話によって生じる。つまり、「大学生である」という情報に対して、「まあ」によって「曖昧性」を与えているのである。

ここで注目したいのは、B発話の「曖昧性」が、「太郎についてよく知らないから曖昧に答えた」という解釈を生まない点である。この事実は「まあ」が「発話者の十分な情報」を表示する事の検証となるだろう。

3.2 メタな視点

先行研究が注目する“概言性”は、発話内容に対するある種の躊躇と捉える事ができる。「内心のわだかまり」(大工原 2010), 「いろいろ問題はあるにしても, ここではひとまず」(川上 1993) など。躊躇の前提にあるのは、発話内容に対するメタな視点である。本発表ではこの性質に注目したい。

「まあ」は、「痛い!」のような反射的な発話、あるいは気付き・発見の発言などと共起できない。次は、川田(2007)の例文である(一部改変)。

(15) (机の上のパソコンを見て) ??まあ, 新しいパソコンを買いましたね。

(16) (卒業名簿を見たら, みちこの姓が変わっていた。) ??まあ, みちこはもう結婚したらしい。

このような気づき・驚きを伝える発話では、驚き以外の「まあ」は共起できない。気づき・驚きの発言に、発話

内容をメタに見るゆとりはない。この事実は「まあ」がメタな視点を表示する事の検証となるだろう。

3.3 結論:「まあ」の中心的機能

(17)「まあ」の中心的機能は次の二点を示す事である。

- 1 発話者はメタな視点に立っている。
- 2 発話者は話題に関して十分な情報を持っている。

3.4 自慢と謙遜

自慢と謙遜は、十分な情報を持つ自分をメタな視点から評価する発言であり、仮説(17)に合致する。そして、自分に対する評価が厳しければ謙遜、甘ければ自慢となるが、両者は基本的に同じ行為のため境界は明確ではない。

(18) まあ、私なんて大した事ありませんよ。(作)

(18) は表面的には謙遜だが、中身が凄い事なら自慢に聞こえるだろう。なお、自慢や謙遜と無縁であっても、インタビューのような自分を語る場面では「まあ」「ま」が現れやすい。ちなみに、状態を曖昧に表現する「まあまあ」は、対象をメタに見ている事だけ語って評価結果を語らない表現から生まれた用法と考えられる。

3.5 和らげ効果

日常会話では逆接や譲歩の直前に立つ「まあ」がしばしばみられる。

(19) まあでもなんか。まあでもそう考えたら、日本語教師としてのあれはあんま関係ないなって。(話)

(20) 独立して、まあ一応、司法行政領地全部あるから。(話)

これらの「まあ」には、逆接や譲歩を和らげる効果が感じられる。「和らげ効果」は、逆接・譲歩に限らず、日常会話では多くの「まあ」に感じられるもので、「まあ」を使用させる大きな要因と考えられる。「和らげ効果」に感じるのは、遠慮や照れに近い印象である。発言内容に対するメタな意識がこのような含意として固定化する点に、日本語表現の特質の一端が垣間見える。

3.6 中心的機能と“概言性”の関係

仮説(17)と典型的な“概言性”をつなぐために、次のように考えてみたい。「メタな視点」と「十分な情報」が組み合わさると発言者の優位性が際立つ。その結果、「まあ」が導く部分はただのコメントではなく、何かを教示するような含みを持つだろう。(「まあ」の尊大な含みはここから生まれると考えられる。)

一方、言葉によって教示する方法を考えてみよう。手続きの違いによって分ければ、教示方法は、直接提示、例示、隠喩的説明の三種類になる。そして、「まあ」の用法・含意は全て、この三パターンのいずれかに対応すると考える事ができる。ごく簡単に言えば、『「まあ」は教示の含みを持つため、その用法も教示と同じパターンを取る』となるだろう。

3.6.1 隠喩的説明

典型的な“概言性”は隠喩的説明に対応する。

(21) 彼は、まあ、優等生だな。(作)

(21) が伝えているのは、「彼」と「優等生」が隠喩的關係にある事、すなわち「彼」と「優等生」の間に類似關係が成立する事である。その結果、(19)は「彼は優等生に近いもの」といった意味で理解される。さらに、「まあ」が数字と組み合わせられると、隠喩的説明の含意が、それに似た数字(近い数字)の意味となり、正確な数字と共起しにくくなると考えられる。次は富樫(2002)の例である。

(22) ?? 1980 円に消費税だから、まあ、2079 円だな。

3.6.2 例示

2.2 に示した「例示の時」がこれである事は言うまでもないが、大工原(2010)が「但し書き的用法」と名付けた典型例もここから説明できる。

(2) リンゴの産地と言え、まあ、青森ですね。

例示とは複数候補から選択した結果であり、それが感じさせる印象を(2)に即して具体化すれば、「他の名産地もあるけど」といった「わだかまり」になるだろう。

3.6.3 直接提示

1.2 に示した“概言性”を想定できない「まあ」は、直接提示に当たる。

(5) ですから、失業者が数百万、で一ま32年あたりに 600 万人の失業者というふうなところ、(後略) ただし、直接教示に当たるのはこのような特殊な「まあ」だけではない。隠喩的説明と例示以外の「まあ」は全て直接提示に分類されるからである。

何かを教示する時、例示や隠喩的説明を使う事は稀である。「まあ」も同様で、収集した用例中で例示や隠喩的説明に分類できるのはごく僅かであった(ただし、中間的な用例も少なくなく、これらの境界は必ずしも明確ではない)。

4 「まあ」の特殊な用法

4.1 驚き

驚きの「まあ」は、十分な情報とメタな視点という含意が、「通常とは異なる評価基準で」といった印象を作る事で生まれた用法と考えられる。例えば、「まあ、えらい!」が、典型的な評価対象として幼児をイメージさせるのは、「通常とは異なる基準」と「えらい」の組み合わせが「幼児用の基準」を感じさせるためだろう。また、「まあ、きれい!」が、典型的な使用者として上品で気取った夫人をイメージさせるのは、「通常とは異なる基準」が審美眼への自信を感じさせるためと思われる。

4.2 なだめ

「まあ、まあ・・・」という反復形を典型とする、なだめの「まあ」は、冷静な立場から興奮した人を落ち着かせる発話であり、メタな視点を強調して生まれた用法と考えられる。ただし、「まあ、まあ・・・」の後に新たな情報の来る事が期待されるため、メタな視点と十分な情報の両方を強調した用法とも考えられる。

5 今後の課題:「まあ」の発話要因

「まあ」の必要性は用法によって異なり、隠喩的説明では高いが、それ以外での発話は“任意”である。参考として、講義における「まあ」「ま」の数を報告したい。講義はメタな視点を使いながら進行するので「まあ」の出現条件を常に満たしているが、出現数は講義によって大きく異なる。調査した5つの講義における「まあ」「ま」を合わせた数は、176, 102, 90, 34, 8であった(なお、「8」の講義は学生の話合いを含み、教師の話は30分程度である)。また、講義中に「まあ」が集中する場所があるものの、それらに共通する条件を見出すには至っていない。「まあ」を発話させる要因は重要な問題と思われるが、現段階では内面を「あからさまに」表現した結果としか言えない。今後の課題である。

注 調査した先行研究の中では、川田(2007)が“概言性”を使わない唯一の研究であり、話し手と聞き手の情報の共有という点から「まあ」を説明している。ただし、この仮説は大工原(2010)によって批判されている。

参考文献

- 川上恭子(1993). 談話における「まあ」の用法と機能(1): 応答型用法の分類 園田国文, 14, 69-78.
川上恭子(1994). 談話における「まあ」の用法と機能(2): 展開型用法の分類 園田国文, 15, 69-79.
川田拓也(2007). 日本語談話における「まあ」の役割と機能について 言語学と日本語教育V, 175-192.
定延利之(2016). コミュニケーションへの言語的接近 ひつじ書房
大工原勇人(2010). 日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究: フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて 神戸大学博士学位論文
富樫純一(2002). 談話標識「まあ」について 筑波日本語研究, 7, 15-31.